安寧に思う

坪山直生　京都大学大学院医学研究科教授

安寧とは安らかで無事であることである。安という文字は家の中に女性が落ち着いている様子を表し、寧は屋内に盤を用意して神様をお迎えし安んじる姿で、ともに安定して平穏であることを示すのだそうだ。

安寧は第三代天皇の諡号として贈られている。第二代綏靖帝から第九代開化帝までは「欠史八代」といわれ、その実在が否定されてきた。また初代神武帝も長く架空の人物であるといわれてきた。しかし近年関連史跡の再検証などにより、神武帝については記紀の記載の素材になった人物が実在したという説も有力になってきているという。だとすると、彼と後世の天皇との間に一本の血脈が繋がり、その流れの中に安寧帝もあったとして不思議ではない。

安寧帝が実在かどうかの議論は措くとして、諡号であるから生前の名ではない。贈られたのは奈良時代、762年から764年にかけてである。当時は乱世であった。飢饉があいつぎ、暴動も絶えなかった。政治も不安定で実権は橘諸兄から藤原仲麻呂、さらに道鏡へと移り、その度に大きな争乱があった。

諡号選定の任を与えられたのは淡海三船という人である。当代きっての知識人である一方、複雑な背景を持った人物でもあった。672年の壬申の乱で、天智帝の太子である大友皇子に皇弟大海人皇子が反旗を翻した。朝廷を二分した争いは大友皇子の自害で終結し、大海人皇子が天武帝として即位、その後天武直系の天皇が続いていた。

その天武系の世にあって、三船は大友皇子の曾孫、つまり天智直系だったのだ。756年には朝廷誹謗の罪で禁固刑に処せられてもいる。諡号撰進事業には天武系朝廷の正統性を示す目的も含まれていたと想像され、朝命によってその役目を負った三船の心境はかなり複雑なものであっただろう。

その彼が、まだ天智系も天武系もなかった黎明期の天皇に安寧の名を贈った。ちなみに安寧帝の父とされる第二代天皇の諡号綏靖も同様に「安らか」という意味であり、第四代以降にも徳や孝を讃える名が続いている。この上なくすぐれていて強いという意味の名を贈られた初代神武帝と好対照である。神武帝崩御に際してはかなり激しい跡目争いがあったことが伝えられているが、確立期の混乱が落ち着いた後は静かで安定した平和な世の中が続いていたに違いない、そうあって欲しいという思いが、混乱の世に腹に一物ありつつ任にあたった三船にはあったのではなかろうか。

話は飛ぶが、1250年後の現在もまた、いわば混乱の世である。不況が続いている。二度の大震災もあった。政府は国民の十分な信頼を得ていない。近隣諸国との間に火種がくすぶっている。嘗ては想像できなかったような事件も起こる。他国に先駆けて超高齢社会に突入した。もちろん終戦直後の混乱期とは比較できないし、諸外国に比べるとまだまだ治安も良く、豊かさと平等の平衡のとれた良い国だとの見方も当然できる。が、高度成長期やそれに続く安定成長期からみると、相対的に不安の時代であるといえる。

この時代に安寧の都市を謳ったユニットが船出をして3年が経った。ユニットは着実な歩みを続けている。多様な基盤を持った履修生が集まり、教員と共に自らの興味と専門性を活かした実践プロジェクトで成果をあげつつ、相互に忌憚のない意見交換がされている。防災、救急医療体制、地域コミュニティー、高齢者福祉、都市交通、

道路行政、都市景観などが主なキーワードであるが、特定の課題の狭い領域にとどまらず、できるだけ複視眼、広視野で議論しようという姿勢が素晴らしい。また、道路計画課に所属する履修生が地域自治会活動のテーマに取り組むなどの例もみられる。時代の閉塞感を打破するには、まず個々が自らの殻を破ることが重要であり、担当教員、履修生各位のご努力に改めて感謝したい。

ユニットの目指す安寧の世は、ただ静謐で平和というだけでなく、落ち着いた中にも活力のある動きと澱みのない情報交換と健全な議論があり、次代への夢が紡ぎ出されていく社会であってほしい。

高齢化の問題を例にとっても、その負の側面への対策を考えることはもちろん大切であるが、正の側面にも着目したい。介護が必要な人たちは今後も増えていくであろうが、その数倍もの「経験に富み、智慧をもった健やかな高齢者」が増えると予想される。そういう方々の能力、エネルギーを社会の安定、発展に向けてぜひ活かしたい。やりたいことがある、行きたい場所がある、歩きたい道がある、会いたい人がいる、そのようにして多くの人の心が自然に動き、体も動く、そのような世の中であってほしい。

ユニットにとっては、これからがなお重要である。研究し、議論した内容をどのように実際の施策に反映させるか、新しい価値観をどう発信するかなど課題も多い。私達一人ひとりが自らの発想、論理を大切にし、それらと歴史を尊重する心、他者を尊重する心との間に平衡を築き、一歩ずつ歩んでいくしかないと思う。

諡号撰進から30年余りの後、時代は桓武帝による遷都を経て平安の世を迎える。人々はひとときの安寧を得たであろうか。律令制と現実との乖離など矛盾が拡大する一方で、810年の薬子（くすこ）の変を最後に12世紀の保元・平治の乱まで、武力による大規模な政治抗争はなかったとされる。

安寧天皇 畝傍山西南御陰井上陵（奈良県橿原市）